

新医業芳名録

(69)

産学一路西川

或る脱走者

時は昭和二十年十二月二十五日。

暗夜にまぎれて十頃にも足りない一隻の漁船が焼玉エンジンの音をしのばず横にして大速の埠頭の片端から旋轉する支那海へ出て行つた。船にはその当時の調理少佐が就いていた。彼は世に謂う超前部隊であつた。その頃の日本陸軍の把頭に謂する破踏は高度の秘密に属していたので、今日でも時折マスコミで何とか報道されたり、時には人道問題と並んで起きた事件ではいたが、灯火もなければ、第一、航跡になくてはならない羅針盤もない小舟であつた。彼を祀るのは自ら正義で船にはその夫人と子供を含めて三人が乗っていた。祀れる人はこの日に備えて此の機会にも心を繋つて来たので、ともかくも朝鮮半島の見える

方へと先づは新潟州を目指して東へ東へと暗夜に船を走らせることにした。

自ら正義はその頃の軍の連絡少佐として大速で敗戦の報を知ったのだつた。そして、自ら少佐が就いていた部隊は世に謂う超前部隊であつた。その頃の日本陸軍の把頭に謂する破踏は高度の秘密に属していたので、今日でも時折マスコミで何とか報道されたり、時には人道問題とからめての所論もあつたりするのだが、その実体は当事者の外には今日も明らかにはされていない様である。ただ、取扱の一つとしての把頭の研究は日本ばかりでなく各國で秘密裏に行われていた様で、現に最近にも北米のニューヨークの地下鉄の中で暗黙の内に一層の実験が行

前略

先日は御世話様です。
遠方からお南御出張になりたる分左あほしも出でまへ
誠に申しわけありません。
終戦時は、焼出しした時の西川先生の記事を同封し対
河井農會へ九州へ出張、院長崎へゆきりいは

目黒 小多